PFF Aw ard 2024

［コンペティション部門］PFFアワード2024

とてつもない情熱と、自由、クリエイティビティが詰まった「自主映画」。
「PFFアワード」はそんな自主映画のためのコンペティションです。
今年は前年より135本多い692本の作品応募をいただきました。入選作品は19本、監督20名の平均年齢は23.1歳、映画の未来を拓く若き才能に、ぜひ会いに来てください！
入選監督たちには映画祭に先立ち、いま、夢中なことは？を聞いてみました。

〈入選作品が決まるまで〉

「PFFアワード2024」は、2023年3月24日以降に完成した作品を対象に、2024年2月1日〜3月23日の期間、公募しました。692本の応募作品は、PFFディレクターを中心に、映画監督、プロデューサー、劇場スタッフ、ライター等からなるセレクション・メンバー17名で拝見しました。一次審査は、「1作品につき3名が必ず最初から最後まで、1分1秒もらさず観る」というルールのもと、全応募作品を鑑賞。一次審査会議では、セレクション・メンバー全員が集まり、各人が他のメンバーにぜひ観せたい作品を推薦、議論を重ね、通過作品を決定。続く二次審査では、一次通過作品をセレクション・メンバーがすべて鑑賞。再び全員が集まった審査会議で、2日間にわたって個々の作品に対する考えを伝え尽くしました。最終判断はPFFディレクターに委ねられ、入選作品が決定しました。

『I AM NOT INVISIBLE』川島佑喜

『さよならビーチ』遠藤愛海

『アイスリンク』王 紫音

『秋の風吹く』稲川悠司

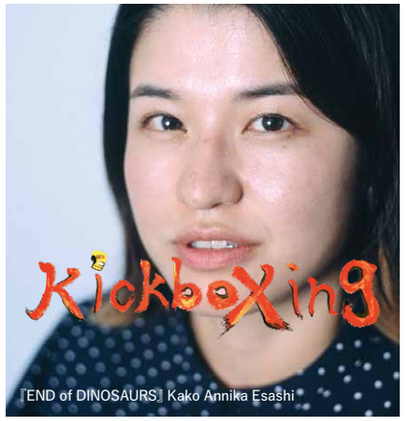
『あなたの代わりのあなた展』山田 遊

『サンライズ』八代夏歌

『正しい家族の付き合い方』ひがし沙優

『ちあきの変拍子』福留莉玖

『Into a Landscape』山中千尋



『END of DINOSAURS』Kako Annika Esashi

『季節のない愛』中里有希

『ちあきの変拍子』白岩周也

『チューリップちゃん』渡辺咲樹

『分離の予感』何 英傑

『鎖』杜 詩琪

『これらが全てFantasyだったあの頃。』林 真子

『さようならイカロス』田辺洸成

『松坂さん』畔柳太陽

『よそのくに』尾関彩羽

『わたしのゆくえ』藤居恭平

セレクション・メンバー　*Selection Members*

荒木啓子（PFFディレクター）
植木咲楽（映画監督）
大久保 渉（ライター／編集者／パブリシスト）
折田侑駿（ライター）
木村奈緒（ライター／美術学校スタッフ）
久保田ゆり（PFFスタッフ）
竹中翔子（映画館支配人）
長井 龍（映画プロデューサー）
中根若恵（映画研究者）
中山洋孝（会社員）
新谷和輝（ラテンアメリカ映画研究者）
原 武史（レンタルビデオ店スタッフ）
髭野 純（映画プロデューサー）
宮城 伸（クリエイティブプロダクション社員）
森川和歌子（映画人材育成事業スタッフ）
湯川靖代（映画配給会社代表）
和島香太郎（映画監督）

※50音順

PFFアワード2024最終審査員　*PFF Award 2024 Juries*

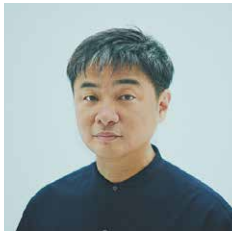
©松本拓海

小田 香　*Oda Kaori*　フィルムメーカー/アーティスト

1987年、大阪府生まれ。2016年、映画監督タル・ベーラ指揮によるfilm. factoryプログラム博士課程修了(第1期生)。ボスニアの炭鉱を主題とした映画『鉱 ARAGANE』(15)で山形国際ドキュメンタリー映画祭・アジア千波万波部門特別賞受賞。ユカタン半島の洞窟泉を撮影した映画『セノーテ』(19)で第1回大島渚賞受賞、芸術選奨新人賞受賞。最新中編『GAMA』(24)はMoMA Doc Fortnight、Cinéma du réel、Festival du cinéma de Brive(SFCC批評家賞)など国内外の映画祭で上映された。

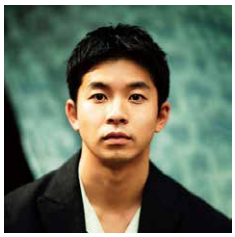
小林エリカ　*Kobayashi Erika*　作家/アーティスト

目に見えないもの、時間や歴史、家族や記憶、場所の痕跡から着想を得た作品を手掛ける。著書は小説「最後の挨拶His Last Bow」、「トリニティ・トリニティ・トリニティ」、「マダム・キュリーと朝食を」、コミックに「光の子ども 1-3」(リトル・モア)他。近刊は「彼女たちの戦争 嵐の中のささやきよ!」(筑摩書房)と、音楽家寺尾紗穂との朗読歌劇作品にもなった「女の子たち風船爆弾をつくる」(文藝春秋)。



高崎卓馬　*Takasaki Takuma*　クリエイティブ・ディレクター/小説家

1969年、福岡県生まれ。電通ジャパン所属。2024年には3度目になるJAAAクリエイター・オブ・ザ・イヤーを受賞など、国内外の広告賞の受賞多数。第76回カンヌ国際映画祭で、役所広司が最優秀男優賞を受賞した映画『PERFECT DAYS』(23)では、ヴィム・ヴェンダースと共同脚本・プロデュースを担当。著書に、小説「はるかかけら」、「オートリバース」(中央公論新社)や絵本「まっくろ」(講談社)などがある。毎週金曜深夜 J-WAVE「BITS & BOBS TOKYO」ではMCを担当。


©三宅英文

仲野太賀　*Nakano Taiga*　俳優

1993年、東京都生まれ。2006年、俳優デビュー。映画『すばらしき世界』(21)で日本アカデミー賞助演男優賞などを受賞。近作にNHKの連続テレビ小説「虎に翼」とドラマ「拾われた男」、映画『笑いのカイブツ』(23)、『熱のあとに』(23)など。7月放送のドラマ「新宿野戦病院」(フジテレビ系)でW主演するほか、舞台『峠の我が家』(10月25日～東京公演)に主演、11月1日公開の映画『十一人の賊軍』でW主演。26年1月スタートの大河ドラマ『豊臣兄弟!』では主人公の豊臣秀長役に抜擢。

吉田恵輔　*Yoshida Keisuke*　映画監督

1975年、埼玉県生まれ。自主映画を制作する傍ら、塚本晋也監督作品の照明を担当。2006年『机のなかみ』で長編映画監督デビュー。オリジナル脚本作品に『純喫茶磯辺』(08)、『さんかく』(10)、『ばしゃ馬さんとビッグマウス』(13)、『麦子さんと』(13)、『犬猿』(18)、『BLUE』、『空白』(21)、『神は見返りを求める』(22)。漫画を原作とした『銀の匙』(14)、『ヒメアノ～ル』(16)、『愛しのアイリーン』(18)も監督。最新作『missing』が9月17日からNetflixで配信。

※50音順

PFFアワード2024各賞

最終審査員が選ぶ3賞5作品

▶グランプリ　〈副賞100万円〉
映画監督として最も期待したいつくり手に贈られます。

▶準グランプリ　〈副賞20万円〉
グランプリに迫る才能を感じさせるつくり手に贈られます。

▶審査員特別賞　〈副賞10万円〉
無視することができない才能を感じさせるつくり手に贈られます。(3作品)

PFFオフィシャルパートナーの選ぶ賞

▶エンタテインメント賞(ホリプロ賞)
作品の優れたエンタテインメント性に対して贈られます。

▶映画ファン賞(ぴあニスト賞)
一般審査員の方々に選出される賞。「映画館で見たい」才能に対して贈られます。

観客が選ぶ賞

▶観客賞
観客の人気投票により、最も高い支持を得た作品に贈られます。
映画祭会場にて、各プログラムの上映の際に配布される「観客賞投票用紙」による投票の他、DOKUSO映画館でのオンライン視聴でも1人1票の投票が可能です。

※各賞受賞者にはPFFスカラシップへの挑戦権が贈られます。
※グランプリはじめ各賞は、9月20日(金)に行われる表彰式にて発表されます。

最終日9月21日(土)に受賞作を上映
※上映作品は9月20日(金)に公式サイトで発表します。

12:00～　準グランプリ含む受賞作
15:30～　グランプリ含む受賞作

PFF Award 2024

9. 8日 14:30～
9.13金 17:00～ 小ホール

『I AM NOT INVISIBLE』

カラー／24分
監督：川島佑喜
協力：Jonathan Reyes、Kiwie Kondo、Mai Pérez Yada
出演：Chie Kondo

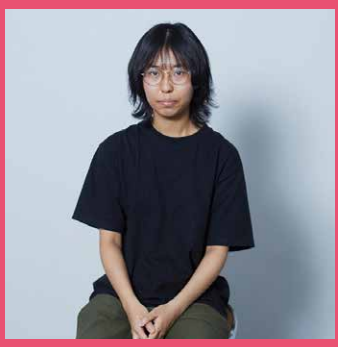
スラムと「私」、等身大の記録

フィリピン人の祖母にお願いし「私」が訪れた地は誰にも知ろうともされていないフィリピンのスラム。「ここはインビジブル（＝誰の目にも留まらない）」と言う現地の人々へのインタビューを通して名もなき街の暮らしが映し出される。
帰国後、ドキュメンタリー作品として映像をまとめながら、被写体に思いを馳せ、今度は自分にカメラを向けビデオチャットで祖母とスラムについて語り出す。環境を言い訳にせず努力しなきゃと語る前向きな祖母と、恵まれているのに何もできない、強く在れないと自分の気持ちをさらけ出す「私」との対話は誠実で力強い。
悩みながらも被写体と必死に向き合い続けようとする、今の「私」だからこそ撮れたこの映画を目撃せよ！

原 武史（レンタルビデオ店スタッフ）

監督：川島佑喜
Kawashima Yuki

2002年、東京都生まれ。父の影響で幼少期から映画好きに。中学高校と続けた油絵をやめ、現在は武蔵野美術大学映像学科に在籍。大島新氏の授業でドキュメンタリーに触れ、フィリピンで初めて自らカメラを回した。



Q. 本作をつくろうと思った経緯、作品に込めた思いを教えてください。

A. もともとは義理の祖母に会いに旅行のつもりで訪れたフィリピンで、車で観光地を連れ回してもらい、その帰り道、ここからは窓を決して開けてはいけないと言われた場所がありました。
緊張しながら窓の外を見て、路上で横たわったり物乞いをする人々を見た時、こうやって安全圏から眺めて通り過ぎてしまうのはダメだと思いました。
自分なりに誠実にドキュメンタリーと向き合いたいと思って、作者である私が苦悩する姿にもカメラを向け、それ自体を作品に入れ込むことで、私的なドキュメンタリーを実験的に模索しました。

Q. 会ってみたい「映画人」は誰ですか？ 会えたら何を聞いてみたいですか？

A. イニャリトゥに会って、『BIUTIFUL ビューティフル』のラストシーンについての自分の解釈があっているかを聞きたいです。

『アイスリンク』

カラー／10分
監督・脚本・編集：王 紫音
音楽・音響効果：吳 宜瞳

PFF Award 2024

9.10 (火) 11:30～ 小ホール
9.14 (土) 17:30～

懐かしさを巡る、アニメーション的記憶の放浪

夜の北京、アイスリンクの開場を待つ「私」は、通りすがりの男と取り留めもなく過去を語り合う。消えたクラスメイト、かつて読んだ小説の一節、幼少期の思い出…。記憶は徐々に混ざり合い、長い夜は明けていく。
鮮やかな色彩の風景に、デフォルメされたポップで愛しい人間や動物たちが動き出すことで凝縮された寓話的世界が立ち上がる。一方で環境音は細部までリアルで、その手触りが現実と幻想の間に観客を宙吊りにする。わずか10分のうちに押し寄せる不安や寂寥、安らぎといった感情、草や風の匂い、森や川の温かさ涼しさは、見知らぬけれども懐かしい。「一番危険で一番安全な場所」を探し求めるこの映画こそが、私たちの精神の隠れ家なのかもしれない。

新谷和輝（ラテンアメリカ映画研究者）

Q. 本作をつくろうと思った経緯、作品に込めた思いを教えてください。

A. スケートリンクの氷上に刻まれた軌跡は、人生のさまざまな経験に似ています。この映画は、学部の卒業プロジェクトとして、別れと未来への迷いの中で制作されました。
『アイスリンク』では、成長過程で見過ごされがちな瞬間を描こうとしました。迷いに対する特効薬はありませんが、共有と理解で暗闇を照らせます。この短編映画は、私自身の成長の写しです。幼少期の浙江の記憶と大人になってからの北方の風景を、水彩と2Dアニメーションで描き出しました。

Q. 会ってみたい「映画人」は誰ですか？ 会えたら何を聞いてみたいですか？

A. エドワード・ヤン！　単純に彼への敬愛を伝え、彼の仕事の方法を見てみたいです。

監督：王 紫音
Wang Ziyin

2000年、中国浙江省生まれ。清華大学美術学院の修士課程に在籍。幼少期より絵を描くことや映画に親しみ、学部時代からアニメ制作を始める。本作が初監督作品。現在、MV制作に携わりながら次作の脚本を執筆中。

PFF Award 2024

9. 8日 11:30～
9.13金 13:30～ 小ホール

『秋の風吹く』

カラー／63分
監督：稲川悠司

理不尽な世俗と戦う…じわる、7本の短編

ペン、実写、写真、フィギュア等、さまざまな手法で世の憂いをコミカルに描く短編集。中でもほぼモノクロのアニメ2本が忘れられない。なぜか唇だけが実写なのだ。何とも奇妙で味わい深い。
実はこの映画には副題がある。「金なきに因する7本の映画」…そう、監督はきっと“お金がない”。それ故たったひとりで複数のキャラクターの唇（語り）を演じ分け、あらゆるアイテムを駆使しては、個人制作の極みをいく。そして、卓越した観察力をもって、社会の矛盾や現代のいきすぎた資本主義に静かに立ち向かう。エンドロールを目撃した時、ついにはこの稀有な作家を、このまま腐らせてはならない！ という謎の衝動に駆られた。お金はないが、才能はある！

竹中翔子（映画館支配人）

監督：稲川悠司
Inagawa Yuuji

1997年、愛知県生まれ。中学の頃から映画にハマり、高校1年で初めて自主映画を映画祭に応募。日く「不本意ながら」ほぼひとりで制作するスタイルを続ける。本作のタイトルは石川啄木の短歌から。東京在住。

Q. 本作をつくろうと思った経緯、作品に込めた思いを教えてください。

A. 映画監督になりたかったから。
お金も人脈もなく、大勢の人を巻き込んでひとつの作品をつくり上げるという情熱や求心力も持ち合わせていない、およそ映画監督に向いていない人間が、映画をつくろうとして映画みたいな物しかできなかったというような、哀しみに満ちた心震える感動作になっている。

Q. 会ってみたい「映画人」は誰ですか？ 会えたら何を聞いてみたいですか？

A. リューベン・オストルンドさん。世の中どうかしてますよね？

『あなたの代わりのあなた展』

カラー／18分
監督・脚本・編集：山田 遊
撮影：河野恭平／録音：野村 光／チケットデザイン：せきぐちはるか
出演：早川新之助、大宅聖菜

PFF Award 2024

9.10 (火) 15:30～ 小ホール
9.14 (土) 14:30～

じつは紙一重かもしれない“あなた”と“誰か”

美術館の屋外ベンチで読書をしながら、マッチングアプリで知り合った女性を待つ航平。ところが女性は現れず、前に一度だけ会ったことのある優歌がやってくる。彼女は「あなたの代わりのあなた展」という美術展を観たところらしい。その謎めいた展示内容を実践するかのように優歌は「航平が会う約束をしていた女性」や「航平がずっと想いを寄せている女性」を演じ始める…。
私たちの多くが自分は代替可能な存在ではないはずだと願うが、そうでもないのが現実だ。“あなたの代わり”は存在する。これを監督はネガティブなことだと捉えず、一組の男女のやり取りの中で軽快に描いてみせている。虚構と現実のあわいで展開される、遊戯的な会話劇に魅せられる。

折田侑駿（ライター）

Q. 本作をつくろうと思った経緯、作品に込めた思いを教えてください。

A. 大喧嘩の末、別れると決まったパートナーに「お前はどうせ、素敵な人なら誰でもいいんだろ」という捨て台詞を吐かれた、という話を友人から聞いた。
「素敵な人なら誰でもいい」というフレーズに強く興味を惹かれた。身も蓋もなくて、核心を突いているから。誰でもいいけど、誰でもはよくない。「あなたのことが好きだけど、別にあなたじゃなくてもいい」という事実は、悲しいけれど、救いでもある。その「救い」の側面を切り取って作品にしてみたいと思った。マッチングアプリの隆盛によって、自由恋愛における「誰でもいいけど、誰でもはよくない」ことの難しさがことさら顕著に立ち現れてきている。だからこそ、そこの「救い」に焦点を当てたい。

Q. 会ってみたい「映画人」は誰ですか？ 会えたら何を聞いてみたいですか？

A. エドワード・ヤン！ エドワード・ヤン！ エドワード・ヤン！
最も影響を受けてる（と言いたい）のはキアロスタミですが、撮影現場ではマジでハラスメントおぢだったっぽいことが関係者のインタビューから窺えるので参考にするところはありません。
ジャコ・ヴァン・ドルマルと内田けんじに映画を撮ってない時どう稼いでるのか聞きたいです。

監督：**山田 遊**
Yamada Yu

1995年、東京都生まれ。劇団「品川親不知」主宰。休業に追い込まれたコロナ禍にニューシネマワークショップへ入学、本作が卒業後初監督作品。劇団員が出演・音楽を担当した。小津安二郎記念蓼科高原映画祭にも入選。

PFF Award 2024

9.10 (火) 15:30～ 小ホール
9.14 (土) 14:30～

『Into a Landscape』

カラー／2分
監督：山中千尋
プロデューサー：布山タルト
音響担当：森内慎之助、藤垣美南／音楽担当：一杉敏矢、森内慎之助

銀幕に放たれた「光」の行方を追う、洋々たる短編

たった2分間のアニメーション。人物は登場しない。セリフや、何か言葉での表現があるわけでもない。映し出されるのは絵の具で描かれた風景画のみと、いたってシンプルな構成である。しかし、上映が終わった後の観客の心はとても複雑な、新鮮な発見で満たされるのだろうと私は想像している。映画とは、光の粒の集合体だ。それを思うがままに操ることができたならば、森を生み出すことも、水を湧き上がらせることも、観客を空へ運ぶことだって可能で、スクリーンの中は無限の力で溢れている。本作はそういった映画への所信を、「生」への柔らかな歓びの声を携えて示している。映画館の暗闇で、このきらめきが躍動する瞬間をぜひ目撃してほしい。

植木咲楽（映画監督）

監督：山中千尋
Yamanaka Chihiro

1993年、兵庫県生まれ。幼少期、祖母の住む奈良の山野で遊んだ体験が原風景となり、創作へと繋がった。本作は東京アニメアワードフェスティバル等でも上映。現在、東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻に在籍。

Q. 本作をつくろうと思った経緯、作品に込めた思いを教えてください。

A. この作品は風景画をアニメーションにするという試みから生まれました。大学生の頃から自然をモチーフにした風景画を描く中で、そこに流れる時間や空間の臨場感をさらに伝えたいと考えたことから、アニメーション表現に行き着きました。
今回、風景画をアニメーションにする上で、「風景」を3つの角度からアプローチしました。 それは、現実世界にある風景、3DCGのシミュレーションがつくり出す風景、そして紙の上に絵の具をのせて、広がる絵の具が自由につくり出していく風景です。
現実にある風景のように、人の手でコントロールしきれないところで変化し、つくり出される現象を捉え、アニメーションとして表現することを目指しました。

Q. 会ってみたい「映画人」は誰ですか？ 会えたら何を聞いてみたいですか？

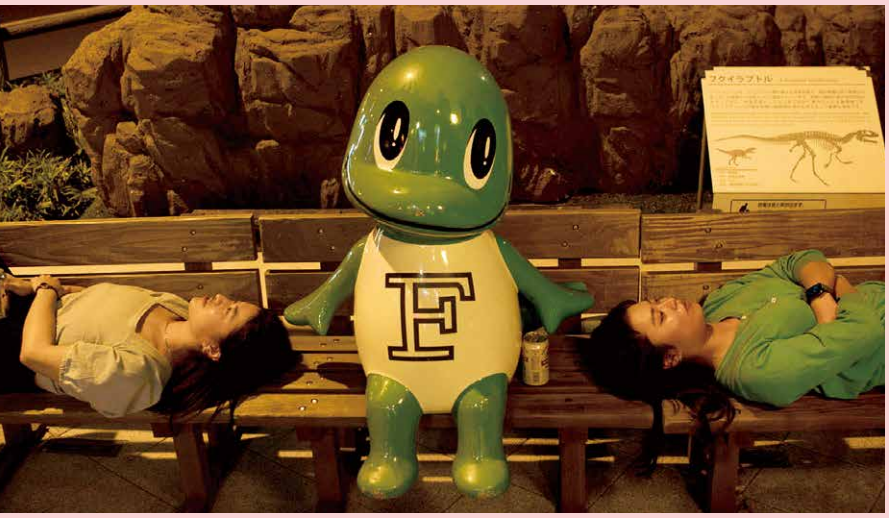
A. ガス・ヴァン・サント監督です。お会いできるだけで嬉しいですが…！『GERRY ジェリー』だけでなく、『エレファント』や『パラノイドパーク』など、彼の独特で美しい風景描写や音の使い方がとても好きで、もし質問できるなら彼の「原風景」について聞いてみたいです！ どんな風景を見てきて、今も心の中にあるのか、とても気になります！

『END of DINOSAURS』

カラー／28分
監督：Kako Annika Esashi／プロデューサー：宮田耕輔／脚本：片山 享、Kako Annika Esashi
撮影・カラーグレーディング：片山 享／録音・MA：杉本崇志
出演：Kako Annika Esashi、Shota Kurt John Imai/JAMIE BADCHILD、Leica Sasafu、柳谷一成、髙橋昌裕

PFF Award 2024

9. 7(土) 14:45～
9.12(木) 13:30～ 小ホール



鮮烈なコラボ！
街づくり恐竜ふくいムービー爆誕

福井県を訪れたことがあるだろうか？ 私はある。この映画のとおり、めちゃくちゃ恐竜がいた。主人公はボストン出身のエイコ25歳。小さな頃から親の転勤で居場所を転々としてきた。成長すると変化を求めてウガンダ、コモロ、フランスと渡り歩き、今は祖母の故郷である恐竜王国・福井で、北陸新幹線開業に沸く街の「再開発」に携わっている。
何よりもまず、監督自身が演じる鬱屈したエイコのキャラクターがとってもチャーミング。大胆な構成、遊び心溢れる語り口と軽やかな編集で物語が目まぐるしく展開されるのだが、彼女の寄る辺ない淋しさが時折ポツリと差し込まれるのもお見事。その硬軟自在な表現力に、あなたもキュン！ っと心を射抜かれるはず。

植木咲楽（映画監督）

Q. 本作をつくろうと思った経緯、作品に込めた思いを教えてください。

A. 2023年夏。福井は変わりたがっていた。
翌春の北陸新幹線開通に備え、「官民足並みを揃え未来へ向かおう!」というメッセージが打ち出されていた。しかし、変化など簡単ではない。新幹線開通への意見は十人十色。これは、3年の福井在住で私が覗き込むことができた揺れる街の気持ちだった。
そして、福井市民と3日間で短編を撮る企画「ふくいムービーハッカソン」から生まれたのがこの映画。解体・再開発で日々変化を遂げる福井駅前のカタチ。今しかない福井をバックに、変化にもがく外国人、変化を起こすドラァグクイーン、変化に動じない天真爛漫ガール…。向き合い方は、各自違っていい。このファンキーな化学反応をお楽しみあれ！

Q. 会ってみたい「映画人」は誰ですか？ 会えたら何を聞いてみたいですか？

A. チェコ映画の先駆者であるヴェラ・ヒティロヴァー監督。『ひなぎく』の編集で迷った場面、演出面では決まった動きをどのように役者とつくり上げたのか、何を恐れて表現をしていたのか、そして彼女が思い描いた自由を主軸に現代社会が進行、後退、それとも動いてないように見えるか聞きたいです。あと、犬派か猫派か！（笑）

監督：*Kako Annika Esashi*
カコ・アニカ・エサシ

1997年、アメリカ・マサチューセッツ州生まれ。自主映画の現場で映画づくりを学び、2020年から自らも制作を開始。本作は国連で働きながら完成させた。現在、ハワイで山火事を題材にドキュメンタリーを制作中。

PFF Award 2024

9. 7(土) 11:30～
9.12(木) 16:30～ 小ホール

『季節のない愛』

カラー／84分
監督・脚本・編集：中里有希
撮影：溝江楓花／劇中詩：鈴木ひかり／題字：安彦柳雪
出演：杏奈、愛甲奈美、吉田なおこ、鈴木由美子、小野魁斗

30歳、再会したふたりは幸福の鐘を目指す

早くに結婚して夢を諦めた望美と、命を断とうとした過去がある高校教師・依子。ふたりは高校時代の友人で、ある日、祖母の住む実家へ戻っていた望美を依子が訪ねてくる。依子は自らの体験を基に書いたという小説を望美へ渡す。ふたりは会話を重ねるうち、昔の約束を果たすため、鳴らせば幸福になるという鐘を目指して山に登ることを決める。
前作『水槽』で雪が舞う季節に衝動的な10代のガール・ミーツ・ボーイを描いたのとは対照的に、本作は東北の夏を舞台に30代の女性ふたりの喪失感や葛藤を落ち着いたリズムで捉えていく。監督自身が高校時代の友人へ思いを馳せたという本作の語りは、観客の心を静かに揺さぶるだろう。

髭野 純（映画プロデューサー）

監督：中里有希
Nakazato Yuuki

2001年、山形県生まれ。東北芸術工科大学デザイン工学部映像学科に入学後、映画制作を始める。前作『水槽』でPFFアワード2022エンタテインメント賞を受賞。現在、東京藝術大学大学院映像研究科の脚本領域に在籍。

Q. 本作をつくろうと思った経緯、作品に込めた思いを教えてください。

A. 『季節のない愛』は、私が曖昧に通り過ぎてしまった過去の出来事に立ち戻るために始まった映画です。私はこの映画をつくることで、友人のこと、映画をつくること、生きることについて深く考えたかったのだと思います。
この映画はやはり“山”が印象的なのではないでしょうか。まだ涼しいとは言えない夏の終わりにみんなで撮影に行きました。一人ひとりが映画をつくっていて、それ以前に山に登っていて、それ以前に生きているのだという当たり前のことが、身体に迫ってくる感覚がありました。極私的な思いを馳せた映画ですが、だからこそ誰かに寄り添える作品になっていればいいなと思います。

Q. 会ってみたい「映画人」は誰ですか？ 会えたら何を聞いてみたいですか？

A. 岡田茉莉子さん。 先日、吉田喜重監督『エロス+虐殺』の上映でお見かけし、それだけで幸せでした。

『鎖』

カラー／21分
監督・脚本・アニメーション・編集：杜 詩琪
撮影：杜 詩琪、馬 銘涵／イラスト：杜 詩琪、郭 月／音楽：王 涵

PFF Award 2024

9.11 水 13:30～ 小ホール
9.15 日 17:30～

私たちを束縛する、赤い鎖

家族の大切さを説く父。今のあなたの年齢で出産した、と語る母。異性同士を前提とした結婚への期待と、それに困惑する監督の思いを映し、実験的な手法で既存の社会規範への抵抗を示すセルフドキュメンタリー。
中国の地方都市を舞台に、監督が新婦に扮して親族も参加する儀式のシーン、伝統的な影絵やイラストによるアニメーション、そこに家族や友人との会話が重なり、結婚、女性性、同性愛について連鎖的に語られていく。
中国では、赤は縁起のよい祝祭色として用いられる。赤い塗料に手を浸けた女性が、家の扉に描きつけた「鎖」の字。ほどなくして緋色の文字は縄へと姿を変え、女性の体を絡め取る。“赤い糸で結ばれる”という言葉の意味を改めて思う。

湯川靖代（映画配給会社代表）

Q. 本作をつくろうと思った経緯、作品に込めた思いを教えてください。

A. 母が「23歳であなたを産んでから、自分の夢なんて考えたことがなかった」と言ったのをきっかけに、家族の期待と自分（の考え）の間に存在する、葛藤を描きたいと思うようになりました。作品に登場する人物はすべて、プロの俳優ではなく、私の家族や友人たちです。
人間のよりリアルな反応を記録したいと考えたため、脚本は大まかな流れだけを決め、セリフも演技指導もなしで、出演者には自由に演じてもらいました。リアルとフィクションの境界を行ったり来たりするようにしました。作品のタイトルは『鎖』です。各々が自分を「あるべき場所」に閉じ込め、自分がやりたいことではなく「すべきこと」をしている、という考えを伝えたいと思っています。

Q. 会ってみたい「映画人」は誰ですか？ 会えたら何を聞いてみたいですか？

A. 『スワロウテイル』のカメラマン、篠田昇さんです。最も印象深かったのは、映画の中で少女がトイレで蝶を見るシーンです。光と影が非常に印象的でした。複雑な感情や空気感を、どのように考えて撮影されたのか、うかがってみたいです。

監督：**杜 詩琪**
Du Shiqi

1998年、中国四川省生まれ。来日し、映画をつくる中で日本語を学ぶ。フランス留学も経験。本作は武蔵野美術大学映像学科の修了作品として、故郷に帰った際に制作した。同大大学院の映像・写真コースを卒業。

PFF Award 2024

9.11 水 17:30～ 小ホール
9.14 土 11:30～

『これらが全てFantasyだったあの頃。』

カラー／72分
監督・脚本：林 真子
脚本・助監督：北林佑基／監督補佐・編集：松本佳樹／撮影：中村元彦／録音・整音：堀内萌絵子
出演：塚田愛実、町田英太朗、米良まさひろ、在原貴生、花純あやの

「夢」は現実と虚構の境界線を飛び越えてゆく

自宅で見覚えのない脚本を見つけた主人公のえみ。彼女は、開いた脚本のページに誘われるようにして役者として仲間たちと過ごした日々を想起していく。そこに挟まれる、自室に閉じこもって脚本を書く男の閉塞感に満ちた日常。交わることがないふたりの世界、過去と現在、虚構と現実を映画は幾層にも交差させ、その境界が徐々に瓦解していく…。
理想と現実の間で揺れる主人公の姿を、本作は、物語の時空間と戯れる自己言及性が観客にもたらす不思議な違和感の中に巧みに位置づけていく。重層的な物語の実験、期待と不安が入り混じる未来への思い、そして軽やかな疾走感を同居させるつくり手の類まれなバランス感覚に酔いしれる一本。

中根若恵（映画研究者）

監督：**林 真子**
Hayashi Mako

1996年生まれ、兵庫県育ち。ヒッチコックの『レベッカ』で映画にハマる。大学はファッション学科に進むが、卒業後、大学時代の仲間と映像制作団体「世田谷センスマンズ」を結成。現在、美術部としても活動している。

Q. 本作をつくろうと思った経緯、作品に込めた思いを教えてください。

A. 主演の塚田愛実さんが韓国に留学する前に1本映画を撮りたいと声をかけてくれて企画が進みました。
愛実さんは韓国に留学したところで何者にもなれないかもしれない、「この先が絶望と分かっていながら希望いっぱいに飛び込む」様子を描きたいと言っていて、愛実さんの想いと私の中にある映画をつくりたいけど「夢を追う以前に自分がもう何かを望むことは許されていない」、そんな状況でも夢を抱いてしまう葛藤を一つの作品に落とし込みました。
物などを使って心情を表現している箇所もあるので気にかけて観てもらえたら嬉しいです。
また、大学時代の先輩にとても素敵な音楽をつくっていただいたのでそちらも着目していただきたいです。

Q. 会ってみたい「映画人」は誰ですか？ 会えたら何を聞いてみたいですか？

A. 高峰秀子さん！ 初めて映画で観た時になんて所作の美しい方なんだと思いました。きっとさまざまな困難を乗り越えたうえでの自立した美しさなんだなと。純粋に人生相談したいです。あと、ピート・ドクター！『モンスターズ・インク』はほぼほぼに暗唱したので聞いてほしいです（日本語ですが笑）。

『さようならイカロス』

カラー／107分
監督・脚本・編集:田辺洸成
原案:田辺洸成、関 翼、大田 健／助監督:関 翼
出演:大田 健、田辺洸成、稲葉釈阿、大野善徳、敦賀伶美

PFF Award 2024

9.11 水 13:30～ 小ホール
9.15 日 17:30～

イカロスは誰か
その先に希望はあるのか

レコードショップの女性店員が気になり、店に通っているケン。ある日、彼女とラーメンを食べに行く機会を得るが、そこで言動の粗野なコウセイに話しかけられる。友人も少なく代わり映えのない日々を送っていたはずのケンだがコウセイと一緒に過ごすうちに、お互いの過去と向き合うことになっていく。そこには無視できない痛みが伴うのだった。
ギリシア神話のイカロスは太陽に近づきすぎたことで死を迎える。10代から20代へ向かう多感な時期の青年たちの出会い、友情、愛情と確執。監督自身も登場するが、出演者みなの面構えが良い。CDプレイヤー、公衆電話、ビデオカメラ、拳銃…。 令和に立ち現れた、どこか平成の香りも漂う青春映画。彼らの焦燥を目撃してほしい。

髭野 純（映画プロデューサー）

Q. 本作をつくろうと思った経緯、作品に込めた思いを教えてください。

A. 20歳になろうとしていた昨年、それは私が最も「孤独」を感じた年であり、おそらくそれは、かつて若者だった多くの人に共通する感覚であると思います。
ひとりでいる時に、そして、誰かといてもどこかに存在している「孤独」とは、ティーンには痛烈に刺さる言葉であり感覚であります。それを主題にした映画、文学、音楽等は数多発表されてきました。
私たちもその中の一端を担おうと思ったのです。ただ、私たちはその中でも、自分たちが感じている具体的な「若さ故の情動」を描きたいと思いました。鋭さと脆さ、そして出会いや別れを私たちが思うままに表現しました。観てもらえると幸いです。

Q. 会ってみたい「映画人」は誰ですか？ 会えたら何を聞いてみたいですか？

A. 塚本晋也監督。とても悩んだのですが、うかがいたいことは山ほどあるので、一つに絞ることは難しかったです。すみません。

監督：田辺洸成
Tanabe Kousei

2003年、福岡県生まれ。小学生の頃から映画づくりを始め、高校時代に撮った『愛の惑星』(22)はTOHOシネマズ学生映画祭等で上映された。作品にはいつも友人が多く参加。現在、青山学院大学総合文化政策学部に在籍。

PFF Award 2024

9.10 (火) 11:30～ 小ホール
9.14 (土) 17:30～

『さよならピーチ』

カラー／124分
脚本・監督・編集：遠藤愛海
撮影：上原恭平／照明：飯島達都／録音：谷川 央／助監督：山崎真理子
出演：向井彩夏、長谷川七虹、林 ひより、倉田彩音、桃児

映画制作に遍在する魅力と実感に溢れた青春群像

卒業制作の映画の主人公ももは、ラストシーンの演技に悩む。参考にしようと、仲間とサイレント映画を観ていたら、その映画の登場人物がスクリーンの中から現実世界に飛び出してきた。ももは彼女に「うり」と名付け、ふたりの不思議な共同生活が始まる。
映画制作に対する探究心、好奇心に開かれた作品。カメラの前にある夕陽の沈む早さを、スクリーンと現実の狭間で出会う虚実のおかしさを、記録装置に収録された現実の生が「じゃあねと別れて、戻ってくる」面白さを、実践を通して知っていく、掴んでいく。そんな実感のこもったショットが、この作品には溢れている。映画、進路、人生に悩むももは、やがて脚本を軽やかに飛び越える。瑞々しいカミング・オブ・エイジ・ムービー。

宮城 伸（クリエイティブプロダクション社員）

監督：遠藤愛海
Endo Aimi

2001年、静岡県沼津市生まれ。京都芸術大学映画学科で古厩智之氏に学ぶ。本作は卒業制作だが、撮影・編集・脚本推敲を繰り返すうち3時間の作品に。筋書きを大幅に見直し、124分となった。現在、同学科に在籍中。

Q. 本作をつくろうと思った経緯、作品に込めた思いを教えてください。

A. 友達のためだけにつくった映画。10年後、みんながこの映画を観てクスッと笑えるような、あの頃とあの場所は今いる場所と地続きだよと背中を押せるような、アルバムみたいな、そんな映画をつくろうと思った。
私はこの卒業制作で映画監督を諦めるつもりだったから、自分と重ねて現実を明らかに見て諦めていく人物と物語を書いていたら、「みんなと映画撮るの最後になるの嫌だな」ってなり、脚本を書かずに夏の間家に閉じこもった。
そしたら家の扉をこじ開けられ、「諦めずに映画撮ろう」と言ってもらえて、ボロボロの未完成脚本で撮影した。

Q. 会ってみたい「映画人」は誰ですか？ 会えたら何を聞いてみたいですか？

A. 山戸結希監督、映画もう撮らないんですか?って聞きたいです。
アスカ・マツミヤさん、映画の音楽をお願いしたいです。
李相日監督、『国宝』の現場に行っていたので、映画のお話を聞きたいです。
コゴナダ監督、小津安二郎の話を聞きたいです。
シャーロット・ウェルズ監督、『aftersun／アフターサン』の脚本について聞きたいです。

『サンライズ』

カラー／24分
監督・脚本・撮影・編集・美術：八代夏歌
ビジュアルデザイン：小嶋日和／撮影助手：戸蒔 葵
出演：八代夏歌、小嶋日和、柄沢健介、安武正博

PFF Award 2024

9. 7 土 14:45～
9.12 木 13:30～ 小ホール

朝と夜、夢と悪夢、冷めた微糖の缶コーヒー

冬。また朝が来る。ヤシロは友人と先生のインタビューを撮る。夜になると魔物が来る。悪霊退散できた暁には、映画監督の夢を語れるのかもしれない。（望む方の）夢と悪夢がせめぎ合う。その先にどんな現実が待つのか。先生のように「制作と生活の融合」を目指すのか。友に倣って「目上の人にビビらず周りの人を使いまくる」のか。
その頃、ボタンの押し間違いで自販機から落ちてきた微糖の缶コーヒーは、どんどん冷たく劣化して、可愛く見せても甲斐はなく、ますます誰にも必要とされないまま、狭い人間関係の中をたらい回しにされる。
おかしな夢のような愛嬌をもって記録された不確実な世界は、今しか撮れなかった切実さに賭けられている。

中山洋孝（会社員）

Q. 本作をつくろうと思った経緯、作品に込めた思いを教えてください。

A. 渾身の一作のつもりだった前作が思うように評価されなかったことが『サンライズ』制作の一番の要因です。高校を卒業し、これから本格的に映画を制作していく手前、そんなままでは納得がいかず、急遽1月ごろに企画をしました。
これまでの制作を経て感じた反省点は改善させること、やりたいと思ったことは必ず取り入れること、これが自分だ、と、自己紹介にできるような映画をつくること。この3つのことを、撮影中、常に心の中に持ち続けました。
フィクションとノンフィクションの混在が、個人的に面白いポイントだと思います。
淡々と当たり前に進む日々の中で起こる、わずかでありながら力強い主人公の心境の変化を見逃さないでください。

Q. 会ってみたい「映画人」は誰ですか？ 会えたら何を聞いてみたいですか？

A. 岩井俊二監督。独自の手法を取り入れた映像美術が魅力的で最も気になる監督です。私自身、美術への関心が強いので、岩井監督の手法が確立されるまでの過程を聞いてみたいです。

監督：**八代夏歌**
Yashiro Natsuka

2005年、愛知県生まれ。中学2年で相米慎二監督の『台風クラブ』に魅了され、愛知県立旭丘高校美術科に入学後、高校2年から映画づくりを始める。本作は3本目の監督作。卒業後、アルバイトをしながら新作を制作中。

PFF Award 2024

9.11 水 17:30～ 小ホール
9.14 土 11:30～

『正しい家族の付き合い方』

カラー／17分
監督・編集・演出・撮影：ひがし沙優
脚本・プロデューサー・演出・撮影：ヒガシ淳郎／撮影：比嘉千晶
出演：ひがし沙優、加瀬 百、小川あみ、内藤御子、ヒガシ淳郎

ずっと一緒にいるための、しあわせ家族計画

父と娘がふたりで過ごす、アットホームな空間――ひとつ屋根の下は、誰も侵してはいけない、かけがえのない住み処！ のはずなのに、“お隣さん”が介入してくる…。〈ドン！〉〈ドン！〉〈ドン！〉と、鳴り響く音。壁をノックするのは誰？ これは悪夢か、現実か？ 常識をぶち破る新感覚ホームドラマがここに誕生！
天地がひっくり返る映画で、アクロバティックな展開に惚れ惚れする。無数に散りばめられた、ひがし沙優監督の型破りな演出は、私たちをまだ観たことのない世界へと連れていってくれる。ホームドラマの枠を飛び越えて、ホラーやSF、ミステリーと変幻自在にジャンルを横断する大胆さは、爽快で頼もしく、ノックアウトされること間違いなし！

長井 龍（映画プロデューサー）

監督：ひがし沙優
Higashi Sayu

2009年、大阪府生まれ。中学生。女優活動と並行し、2022年から映画制作を始め、本作で9作目。スタッフ、キャストは家族中心で、撮影・編集はスマホで行う。YouTubeやゲームも大好きなインドア派。現在、新作を制作中。

Q. 本作をつくろうと思った経緯、作品に込めた思いを教えてください。

A. とにかく、ひと部屋だけで撮影できることと、家族以外の他の出演者の方はリモートでやり取りして動画を送ってもらうという形でつくっているので、それが違和感ない設定を考えることからスタートしました。
作品に込めた思いというか、いつも心掛けていることは、テンポ良いエンタメ作品、分かりやすいストーリーをつくるように意識しています。
特に今回の作品は、最初の1秒から最後の1秒まで意味のあるつくりに仕上げているつもりなので、最初から最後まで楽しみにしてご覧になってくださいー！

Q. 会ってみたい「映画人」は誰ですか？ 会えたら何を聞いてみたいですか？

A. 俳優の方だと石原さとみさんです。ドラマや映画でふと観た時もすごくキラキラしてて素敵なので、なんでそんなにキラキラしてるのか聞きたいです！（笑）
あと私はAPEXなどのFPSゲームをよくやっているので『きさらぎ駅』の永江二朗監督に、なぜ冒頭からしばらく、一人称視点にしようと思ったのか聞きたいです。

『ちあきの変拍子』

カラー／31分
監督・脚本・撮影・編集：白岩周也／監督・編集・撮影・制作進行・脚本：福留莉玖
脚本・撮影・記録・音声：富谷彩愛／音声・撮影・記録・編集：森灘 結／音楽：大倉拓真
出演：上阪彩子、葉狩羽流、靏亀琥太郎、德中美桜、平沢理緒

PFF Award 2024

9. 8日 14:30～
9.13金 17:00～ 小ホール

物語と主人公の魅力爆発
注目の学生団体！

挑戦的なフィクションと、“変拍子”とまさに呼びたいドキドキの展開。心の複雑さを奏でた傑作！ 近年気になる応募作が続く米子高専放送部が初入選。
幼い頃から人に気を遣い、自分の気持ちを我慢する千秋。最近は同級生の春貴が頭痛の種。春貴は千秋を都合よく扱う周囲や内心イライラする彼女に突っかかっては嘲笑い、揉め事を巻き起こす。でも何かが変。みんなには、ひとりで喚いている千秋の姿が見えるだけ。しかも千秋は春貴に口を乗っ取られ、彼の悪態を無意識に発している事態に気づき、追い詰められていく…。春貴は実は!? 案外早いネタバラシのその先の先の先にある最高潮に釘付けに。明朗で深刻で、緩急のめちゃある表現力。級友たちも絶妙！

大久保 渉（ライター/編集者/パブリシスト）

Q. 本作をつくろうと思った経緯、作品に込めた思いを教えてください。

A. 放送部では、毎年、映画を制作しており、当初、企画会議で採用されていたのは、嫌なことばかり口にする空気の読めないクラスメイト春貴が主人公・千秋の気持ちをかき回す物語でした（千秋の我慢する委員長キャラはこの時に既にありました）。
監督（白岩）としては誰かが殴られたり刺されたりするバイオレンスな映像が欲しく、物足りなさを感じていたところ、春貴をイマジナリーフレンドにしちゃう案が浮上し、自分のつくりたい画が撮れそうだと思って設定を変更しました。本作では、自分を取り繕って苦労する千秋が、周りの友達やイマジナリーを通じて成長していく姿を描いています。予想外の展開を楽しんでもらえたら幸いです。

Q. 会ってみたい「映画人」は誰ですか？ 会えたら何を聞いてみたいですか？

A. 白岩：横堀光範監督。MVでの光の表現が多彩で、色味やアングルも懐かしささえ感じられる不思議な感覚になります。撮影で光を調整する際、一番意識している点は何か聞きたいです。あと、堤幸彦監督。どんなものを食べたらそんな面白い発想ができるのか気になります。
福留：「映画人」に詳しくなくて答えるのが難しいです。

監督：**白岩周也**
Shiraiwa Shuya

2006年、鳥取県生まれ。中学の頃からMVやCMに惹かれ、米子工業高等専門学校に入学後、物語のある作品づくりを始める。現在、映像系の学校を目指し、準備中。（写真左下）

監督：**福留莉玖**
Fukudome Riku

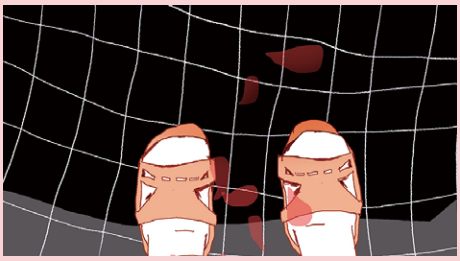
2006年、鳥取県生まれ。米子工業高等専門学校放送部に在籍。助監督・制作進行だったが、白岩監督を手伝ううち共同監督に。本作は「部員みんなでつくりあげた」。（写真右下）

PFF Award 2024

9. 7(土) 14:45～
9.12(木) 13:30～ 小ホール

『チューリップちゃん』

カラー／18分
監督：渡辺咲樹
出演：佐藤ハイジ、井崎 愛、山崎鈴花、藤澤侑生、サンキュータツオ



少し変わった女の子が紡ぐ言葉の魔法

還暦を孫に祝ってもらうことを夢見るチューリップちゃん。子どもが生まれたら「葉っぱが風に揺れる音みたいな名前」を付けたいと思うチューリップちゃん。押し付けがましい「努力礼賛」を嫌い、自分に正直なチューリップちゃん。
皆は「ここではないどこか」に憧れて行ってしまうけれど、チューリップちゃんは決して自分を見失わない。
ごつごつした粗いアニメーションと調子外れな歌が、チューリップちゃんの不器用な生き方そのものを映し出している。誰にも束縛されない、でもちょっぴり淋しいチューリップちゃんの独自の哲学に唸らせられること必至だ。心を豊かにしてくれる素敵なセリフの数々も、ぜひ聞き逃さないように耳を傾けてほしい。

久保田ゆり（PFFスタッフ）

監督：渡辺咲樹
Watanabe Saki

2001年、宮城県生まれ。東北芸術工科大学デザイン工学部の卒業制作として本作を制作。絵画を勉強したことはなく、水野健一郎氏の授業をきっかけに卒業制作でアニメを選んだ。現在、就職して東京在住。

Q. 本作をつくろうと思った経緯、作品に込めた思いを教えてください。

A. 大学の卒業制作としてつくりました。
本当のことを言葉にするのはとても難しいし恥ずかしいことだと思います。たくさん間違えて、ふざけたフリをしてはぐらかして、遠回りをしながら最後の最後、ほんの少しだけ言いたいことが言えたかもしれない、伝わらなかったかもしれない。そのくらいの話を書きたいと思いました。
脚本、作画、編集、エンディングの作詞作曲まで、すべてひとりきりでつくることにこだわりました。チューリップちゃんの世界だけのリズムが生まれたと思います。
主人公にチューリップちゃんという名前を付けましたが、私はチューリップがとても苦手です。そこに注目していただければと思います。

Q. 会ってみたい「映画人」は誰ですか？ 会えたら何を聞いてみたいですか？

A. リュミエール兄弟。映画をつくってくれてありがとうございます。

『分離の予感』

カラー／64分
監督・製作・脚本・編集：何 英傑
製作：袁 鑠涵／撮影：苗 莊莊／照明：張 澤誠／美術：吳 詩瑤
出演：津隈もるく、伊藤 梢、大場みなみ、佐藤 駿

PFF Award 2024

9.10 (火) 15:30～ 小ホール
9.14 (土) 14:30～

“何 英傑映画”という構造物の迷路

とある映画のオーディションで、偶然に再会した男と女。芝居が始まると、その内容は過去のふたりの関係を、浮き彫りにしていくものだった。
繰り返し読まれるセリフで、徐々に明らかになる劇中映画のストーリー。扉、窓、椅子、壁画、テーブルの上の水のボトル…。細部にまで監督の注意がいきわたり、巧みに操られた空間のパーツが観客を物語へといざなう。さらにはふたりの役者、劇中映画のカップル、エチュードで演じる男女、監督と制作担当の女性と幾重にも重ねられた人間関係に引き込まれ、私は、まんまとこの作家による映画という構造物に迷い込んでしまった。もはや“何 英傑映画”と呼ぶに相応しい。作家として別格の技量を見せつけられた気がした。

竹中翔子（映画館支配人）

Q. 本作をつくろうと思った経緯、作品に込めた思いを教えてください。

A. 『分離の予感』は、もともと企画していた2つの短編映画の構想や多くの思想の断片を融合させた作品です。
1つ目は、カフェで別れを迎えたカップルが数年後に再会し、新たな生活を送る様子を描いたものです。2つ目は、ドキュメンタリー形式で、カメラが俳優の本当の姿をどれだけ映し出せるかを探求する内容です。
カメラは時間を記録し、映像として残りますが、撮影されていることを意識した時に、人は「本当の自分」を見せることができるのかという疑問が生まれました。そして、この2つの短編が、『分離の予感』の情景とテーマをそれぞれ構築し、今回の作品になりました。

Q. 会ってみたい「映画人」は誰ですか？ 会えたら何を聞いてみたいですか？

A. アッバス・キアロスタミですね。彼が中国の杭州で撮影する予定だった映画が、逝去により未完のままとなってしまったと聞きました。キアロスタミ監督は、日本でも『ライク・サムワン・イン・ラブ』のような作品を外国人の視点から撮影しており、彼が中国をどのように描くか非常に興味があります。どんな企画だったのかを聞いてみたいです！

監督：何 英傑
He Yingjie

1998年、中国桂林生まれ。武蔵野美術大学に入学後、写真、メディアアート、映画制作を学び、初の長編である本作は第35回東京学生映画祭にも選出された。現在、同大大学院の修士課程に在籍。

PFF Award 2024

9. 8日 11:30～
9.13金 13:30～ 小ホール

『松坂さん』

カラー／39分
監督・脚本：畔柳太陽
撮影：渡辺 亮／照明：町田智哉／録音：色川翔太／エンディングテーマ：Gateballers
出演：佐竹大樹、竹内かりん、川野邉修一、谷田部美咲、荒井典子

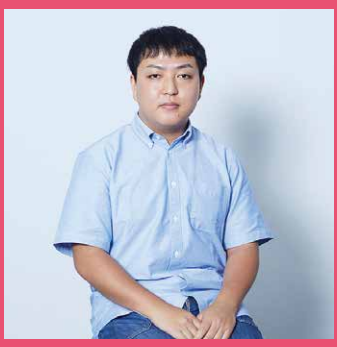
人は人に出会い変化する
だから私は他者と関わる

映画の専門学校に通う木嶋は、夜のグラウンドでひとりトンボをかける女性の映画を構想中だが、脚本をうまく書けずにいる。ある日アルバイト先で出会った松坂さんに心惹かれた木嶋は、一方的に彼女を知った気になり、松坂さんを主人公に据えて脚本を書き進める。
人と関わるのは面倒だし傷つくのは怖い。だけど私たちは、目の前に現れた「よく知らない」けど気になってしまう人のことを「もっと知りたい」と思う。人はそれを恋愛と呼んだりするが、相手を知りたいと思う気持ちに名称など不要なのかもしれない。人は誰しも固有の物語を生きている。その物語は、また別の物語と出会うことで開かれ変化してゆく。他者と関わることの根源的な歓びを描いた一作。

木村奈緒（ライター／美術学校スタッフ）

監督：畔柳太陽
Kuroyanagi Taiyo

1998年、愛知県生まれ。大学卒業後、映画美学校に入学。初監督作『キックボード』(21)が学内で高く評価され、修了制作の本作はSKIPシティ国際Dシネマ映画祭、下北沢映画祭、北海道国際映画祭等にも選出。



Q. 本作をつくろうと思った経緯、作品に込めた思いを教えてください。

A. 映画美学校の高等科の修了制作作品として、締切りのある中、書けるものを書こうとして、書けたものがこれでした。
そのため、内容としても、テーマとしても、自分自身の体験や考えが大きく反映されたものとなっています。この映画を観た友達が「この映画を観てると畔柳さんと喋ってるような感覚になります」と言ってくれたことが心に残っています。この映画を観てくれた人がこの映画に対して抱く印象と、僕自身の印象が少しでも似ていたら嬉しいです。
観どころは、最後のシーンです。出発はあくまで僕自身でしたが、ふたりの人間の物語を描けていると思います。

Q. 会ってみたい「映画人」は誰ですか？ 会えたら何を聞いてみたいですか？

A. ミシェル・ゴンドリーです。一緒にご飯を食べたり、『恋愛睡眠のすすめ』が好きなのでそれを伝えて、色んなことを聞いてみたいです。

『よそのくに』

カラー／9分
監督：尾関彩羽
プロデューサー：高島綾菜
出演：辻美莉愛、天木優花

PFF Award 2024

9. 7(土) 11:30～
9.12(木) 16:30～ 小ホール

いま、ここにある現実は現実？

小学生の葵は波音が響く森の中を進んでいた。遠くから聞こえるリコーダーの音をたどっていくと、森を抜けた草原の先に「うみ」を奏でる少女、渚の姿があった。やがて演奏を止めた渚はさらに遠くへ歩いていく。葵は後を追い、自分のリコーダーに息を吹き込んで渚に呼びかける。
どこか別の“よそのくに”での不思議な出来事が描かれているように見えるが、映画の終わりに汽笛が鳴るのを聞いた途端、よそのくにへ向けて出航するまでの「いま、ここ」の脆弱さが炙り出されているように感じられた。
本作の映像と音の世界は拮抗しており、それでいて見えるものにも聞こえるものにも真実性は希薄だ。それは私が身を置くこの国の現実によく似ているのである。

和島香太郎（映画監督）

Q. 本作をつくろうと思った経緯、作品に込めた思いを教えてください。

A. 草原でふたりの女の子がリコーダーを吹いている画を撮りたいなあと、初めに思っていました。それを取り入れつつ物語をどう展開するか、プロデューサーと話し合いながら企画を進めていきました。ああでもないこうでもないと考えて、とにかく考えた先で、本当にやりたいことだけに焦点を当てることにしました。
本作『よそのくに』は、童謡の「うみ」をモチーフにした、海そしてその先にある「よそのくに」に憧れるふたりの出会いを描いたお話です。
この9分間に、セリフはありません。草原でリコーダーを吹くふたりの動きや表情、耳に入り込んでくるすべての音を楽しみながら受け取っていただきたいです。

Q. 会ってみたい「映画人」は誰ですか？ 会えたら何を聞いてみたいですか？

A. 相米慎二監督です。『あ、春』のエンディングのシーンについて、撮影数日前に急遽撮ることになった別バージョンがあると知りました。なぜその結末も撮りたくなったのか、真意をお聞きしたいです。

監督：**尾関彩羽**
Ozeki Ayaha

2002年、愛知県生まれ。名古屋学芸大学映像メディア学科で仙頭武則氏に学び、3年次作品として本作を制作。セリフを外し、画と音響で観せる演出に挑戦した。現在は、卒業制作作品『ぼくらの宇宙』を制作中。

PFF Award 2024

9. 8日 14:30～
9.13金 17:00～ 小ホール

『わたしのゆくえ』

カラー／23分
監督・脚本・編集：藤居恭平
出演：難波樹音、関戸健人、堀越夕香理

歩く、歩く、ついに走る
いや、止まれ

探偵事務所で日々、淡々と調査報告書をまとめている女性職員・難波。ある時、彼女は編集中の調査映像に目を止める。そこに映った男をじっと見つめると、翌日、大胆な行動に出る。同じ道を行き来して、同じ職場で、同じような作業を繰り返す。ふとその“同じ”から逃れた時、我々は彼女の一挙手一投足から目が離せなくなり、その目的が気になって仕方がなくなる。男を尾行する彼女の姿には緊迫感もあり日常から逸脱した開放感もあり、滑稽さすら感じられる。そして、ついに彼女が走り始めた時の高揚感！ 地味な毎日とはかけ離れた計画は誰にも知られず実行に移され、驚きの結末を迎える。しかし、それすら乗り越え、何よりとにかく彼女は潔いのだ。震えます。

森川和歌子（映画人材育成事業スタッフ）

監督：**藤居恭平**
Fujii Kyohei

1991年、滋賀県生まれ。京都芸術大学で高橋伴明氏らに学び、卒業後は助監督として活動。現在は会社員として働きつつ、家事育児の傍ら、映画制作を続けている。本作は下北沢映画祭コンペ部門にも選出された。

Q. 本作をつくろうと思った経緯、作品に込めた思いを教えてください。

A. 日々仕事や生活に追われる中、映画をつくりたいという気持ちは常に抱いていました。そんな中、自分のことを何でも話してしまうひとりの女性と出会い、対話を重ねる中でイメージが出来あがってきたのです。そして、普段は人目につくことのない、密かな仕事や振る舞いを映画にしました。
出演していただいた多くの方は演技未経験で、映像作品にも出たことがない方たちばかりです。また、普段から交流のある人たち、という訳でもありません。たまたま人づてに集まったメンバーが、この映画のためにほんの少しだけ時間を共にしました。この奇妙な成り立ちの本作を観て、観客の皆さんがどのような感想を抱くのか、興味が尽きません。

Q. 会ってみたい「映画人」は誰ですか？ 会えたら何を聞いてみたいですか？

A. スティーヴン・ソダーバーグ。監督だけでなく、自身で撮影や編集もして、脚本も書いてプロデュースもする。商業映画だけでなくインディーズ映画も撮る。ドラマも撮る。映画も観る。一体どんな生活をしているのか知りたいです。